

6年後の白馬村 —2014年神城断層地震—

長野県神城断層地震から6年、被災した家々が少しずつ撤去され、白馬村堀之内地区が新築の住宅群になりつつある様子は数年前に見ていたが、その後のことが気になって訪れてみた。地震発生の6日後、榎原氏と新聞社の現地調査に同行させて頂いた時は、目の前の光景にカメラを向けることができなかった。家がまるで模型を無造作に転がしたように道や農地に散らばっていた。ガックリと傾いたり、ペシャンコに潰れたりしていた。

6年が経ち新しい住宅がまた少し増え、村営住宅も完成して人が住んでいた。丘の上の、礎石から少しずれたお堂は無くなり、新しい神社が建っていた。新興住宅地のようになった堀之内地区を歩き、3人の方に話を聞くことができた。

■ 誰にも会えそうもないので帰ろうとした時、70代後半とおぼしき男性から話を聞くことができた。地震発生時、自宅から少し離れた作業小屋(木造2階建て築30年程度)の2階に居たという。いきなりの縦揺れで土台(アンカー止め有り)が引きちぎれて、建物は田んぼに転がった。どうやって出たかよく覚えていないが裸足でそこから抜け出して200mほど離れた自宅へ向かった。築100年以上の自宅も大きく傾き、奥さんが出られない状態になっていた。近くの駐車場まで来ていた救急車がどういうわけか来てくれないので、400mほど運ばざるを得なかった。奥さんを助けた後、閉じ込められた〇〇ちゃん(TVで何度も報道された女性)を助けに行ったと言う。裸足で飛びまわっているのを見て、長靴を持ってきてくれた人がいた。しばらくすると、右足が妙にヌルヌルしてくる、何だろうと確かめると血だった。この時まで釘を踏んでいたことに気が付かなかった。

揺れは突然縦にきた。信州大学の先生は横揺れの後で縦に揺れたと言っていたが、そうではない、「縦揺れがいきなり来たんだ」と自分の体験を繰り返した。作業小屋の1階には車や農業機械などが幾つも置いてあった。一部建物の屋根が残っていたが、危険入るべからずの指示で、機械類に手をつけられずに冬になって雪で機械が幾つもダメになった。1階に停めていた車は背の高い車だったが、土台が上部をかすめて弧を描いていったらしく無事だった。亀裂の入った田んぼは修復できる人がいないので、建設業者が直したが、表面だけを平にしたので水持ちが悪く水の管理が大変とのことである。



緑のシートの部分に作業小屋が建っていて、右側の田んぼに転がった。
正面の小屋は単管パイプを組んだだけのものだが、全く被害がなかったという。

■ この地区でお店を営む85歳の女性からも話を聞くことができた。このお宅は多少歪みが出たかなという程度で、問題なく住み続けているという。すぐ隣の家も被害はなかったが、2軒隣の家はダメだった。その時何が起きたかわからなかった。商品が棚から落ちてさらにその上に棚板が落ちたので、道ができて歩くことができた。外に出ると道路に40センチほどの段差ができていた。これは地震だと分かった。救急車が行けないので人が人力でここまで運ばれた。

店なので非常用照明があったため明るかったが、他の家は暗かった。普通の家にもこれがあれば良いのと思った。地震発生時、メガネや手に持っていた携帯などは飛んでいってしまった。地震の時、身の回りのものは飛んでいってしまうから役に立たないことを知ったという。

店の片付けには取引先でもあったクロネコヤマトの人が大勢来て手伝ってくれた。この地区から外へ移ったのは1軒のみで、3～4軒は村営住宅へ入ったが暖かくて快適らしい。その他のお宅はすぐに新築した、これには驚いたという。



村営住宅:1棟に二世帯が入居(堀之内地区には二ヶ所、計14戸分建てられた)

■ 既存住宅を購入し都会から移り住んだという50代の女性は、台所の火を消して2階へ上がった直後に地震がきた。外に出るとお年寄りたちも出ている。皆、一旦は商店に集まった(灯りがあったせいか)。その後避難所へ移動するようになるとのことで車を出して避難所へ行った。夜が明けても直ぐには家に行かないように言われたが、車があるので見に行った。家はなんとか建っていたが基礎がダメになっていた。避難所は畳敷きの広間だったが厳しい状況だったという。まもなくホテルに移動できて一息つき、その後人々は分散した。仮設住宅への入居も可能だったが、隣町の町営住宅へ移った。

この地区のお店では、飲み物を入れる冷蔵庫は外に置かれていて、欲しい人は冷蔵庫から商品を取り出してから小窓を開けたり、店に入るなりしてお金を払うようになっている。そんな地区で被災者が家に近づけない数日間に、農業機械の盗難が幾つかあったという。

自宅は半壊と認定され公費で解体された。今はこの地区に戻って村営住宅で暮らしている。家族用に造られた3DKで広くて快適だという。被災当初、「もうこんな土地には住みたくない」言っていた人々も数年後に来てみると多くが家を建て替えていて驚いたという。

しばらく何となく会話していて帰ろうとすると、なぜか堰を切ったように地震時の生々しい様子を、貴重な体験を語り出してくれたのだ。6年前の地震から地区の風景は激変した。築100年、200年の民家の混じる風景が消えたこの地区を歩いて、歴史を感じさせるものをひとつ見つけた。新しく建て替えられた公民館の近くで道祖神が睨みをきかせていた。1998年、地区をかすめてオリンピック道路が通っているので、この道祖神はさほど古くからそこにあるものではないというが、少なくとも20年ほど前からはあったようだ。

お墓が全部倒れたあの地震でも倒れることなく、雪に埋もれてもじっとそこにおわして地域の様子を、そして人々の心情も見ていたに違いない。



(2020.10.11)